

投句欄 自由律の泉 ⑭

- 1 年用意の境内特異日 木村浩
- 2 足もと見つめてた 介護の早期退職 金澤ひろあき
- 3 雪道に冴え冴えと足跡涌く アカホリフキ
- 4 万華鏡カチツと時空の轍 檜 幽可
- 5 心に追いつけない身体がつんのめる 久光良一
- 6 けんけんば星数える二人 野谷真治
- 7 マヨネーズ地盤に遺骨カルシウム入り土砂 行方ほいさつき
- 8 僕は微粒子ここからは見えない 原さつき
- 9 雨あがる 鳥鳴き始める 大岳次郎
- 10 生きづらさの険しい道のつづく 無一
- 11 故郷の鶏卵煎餅サクツと割れてお正月 白松いちろう
- 12 一家団らんマトリョーシカがタベ見た夢 佐川智英実
- 13 ゆきもよいぶんでんのおかめうどん 大迫秀雪
- 14 蹴ったゴミまた蹴って歩く 和寄はると
- 15 発車しますご注意ください春と僕 中島雲舟
- 16 ゴキブリにも有る目的を確かめる ホームセンター造林鎌
- 17 逃げても逃げても絡みついでくる言の葉「コロナ」 ちばつゆこ
- 18 背中を突き抜け水深く崩れた月の光 荻島架人
- 19 青空あふれビー玉ひびわれる 内藤邦生
- 20 きれいな姿勢でたたずみたい 田辺まさゆき
- 21 雑踏に逆らい進む君の車椅子 新山賢治
- 22 献体した妻の骸と火葬場に向う轟々烈風迫る枯野 小山榮康
- 23 言いわけできない仏の前の菊の首 藤澤雅幸
- 24 落ちてきそうな雲の色持ち上げてやる 田中美太
- 25 力いっぱい抜いた大根の白がうまい 富永鳩山
- 26 大根のカミさんと鰯の粗で金婚 伊藤哲英
- 27 あれも無いこれも無い想像するしかない 富永順子
- 28 語る過去等露ほどもなし今を生きるに捨てられん 植田博
- 29 雲ふたつうそのような青空へ手をかざす 山本説子

30 あの日のさよならなきと春の雪のせい 黒瀬文子

31 残照に浮かぶ三日月を漕ぐ 竹内朋子

32 夕焼けのカーテン閉める白々しい嘘だから 平林吉明

33 貧しかった暮らしも六人家族の掘り炬燵 佐瀬風井梧

34 ときめきは常備薬 いつも心に仕舞ってある 部屋慈音

35 起きそうな街を闊歩する革ジャン 室伏満晴

36 言葉と乖離する涙腺 江藤霧鳴

37 俯いていた人の影を踏んでしまった 湯原柳泉洞

38 空の明るさをうたがう黒豆の深いしわ 井尾良子

39 グラスにつぎたす父の決まり文句 さいとうこう

40 濃厚接触者というコロナのかんむり 平岡久美子

※「自由律の泉^⑬」でこちらに手落ちがあり、和寄はると様の原稿が未掲載になりました。深くお詫びいたします。

鈴なりのピーマン耐えかね枝を垂れ 和寄はると

へ一句鑑賞 忘れ物忘れて笑うしかない 白松いちろう

▼わが家から駐車場までは300歩と離れている。もう何度も車のキーを忘れて取りに帰りました。先日車に着いてロック解除のボタンを押して鍵を忘れていることに気付き情けないことに二往復した。笑うしかなかった。(和寄はると)

● 泉^⑬より 一句鑑賞

ほんとの気持ちは逆さまコウモリ 佐川智英実

▼コウモリは良いイメージでは語られない。コロナ出現の時は悪者にされた。夜のイメージがつきまとう。だが、天井から逆さまにとまってる彼らの視点から世界を見ると、見えなかった本当が見えるのかもしれない。(金澤ひろあき)

▼四・四・四のリズムが、意識的に感情を抑えようとしているようです。こんなこと、言っても仕方ないわ、という諦念の中に可愛らしさが見えるのは「逆さまコウモリ」という語のなせるワザなのではないでしょうか。絵本の世界の乙女心に触れた気分になりました。(大迫秀雪)

▼ほんとの気持ちって本人にも分らないのかも。だからじつと逆さになら下がつて自分の動きを待つコウモリのようなのかも知れない。出だしとこうもりの取り合わせがお見事です。(中島雲舟)

月が昇ってゆく空にある傾斜 黒瀬文子

▼少しづつ方角を変えながら昇ってゆく月を見ていると空に傾斜があるように見えます。暗い夜空をななめに昇ってゆく月は、少しでも高みに昇って遠くを見たいという作者の気持ちと重なっているのではないのでしょうか。(久光良一)

▼「空にある傾斜」とは、昇っていく月明かりに照らし出された稜線と山肌のことです(時期に因っては赤城山だったりもして) 満月など陰影のはっきりした夜等であれば一層圧倒される風景ですね。「傾斜」には月の軌跡も含んでいるのかも知れません。何れにしても写実的で無形容詞の秀逸句だと思います。(檜幽可)

▼自然の風景を詠んだ句に作者の上昇する希望を感じます。月は空に傾斜があるようにゆっくりと時間をかけ昇ってゆきます。その傾斜にあなただけの希望をのせ満月になり充実しますよう祈ります。(内藤邦生)

▼冬の月は高度が高いことを知りました。傾斜と表現されて、勢いや厳しさを感じています。
(竹内朋子)

穢れたわたしの手に子がしがみつく

室伏満晴

▼「穢れたわたし」が本当に他者から見ても穢れているなら子供が近寄ってくるだろうか。仮に子供が切羽詰まった環境に居たとしても、救いを全く見出せない人間にすがる様な真似をするだろうか。「わたし」は子供の手を取るか否か激しく葛藤し、描写を通して自らの内面と闘っているように感じた。
(江藤霧鳴)

▼しがみつくと、というのは懇願の様ではあるまい。無邪気なその様な気がする。子の世界に色はない。ただ自分だけが色をつけている。その様の対比が良い。ただ一つ、願いが届くとすれば、その色を決めているのはすつかり自分であることに気がつくことでもある。(湯原柳泉洞)

▼子どもにとって全幅の信頼を寄せられるのが親。それを裏切る悲惨な事件もある。「穢れたわたしの手」の自覚と親であらねばならないことへの思いが親であることを許し、親に育ててくれたと思っている。
(伊藤哲英)

▼想像力をかきたてられます。コロナの折柄、アルコール消毒してない手とか、しわすれた手とか、そんなふうにも思えますが、そんなふうに思わせて、もつと深い別のことを暗示しているようにも。何も知らない子供は気の毒。
(行方ほいさつさ)

不整脈を捕まえる心電図計深夜の出勤

白松いちろう

▼ずいぶん前の健康診断で、指摘を受け、定期的な診察と、年に数回、心電図を取っている。なるべく無理をしない日々です。どうか、お身体、ご自愛下さい。「捕まえる」が印象的です。
(野谷真治)

▼不安な深夜の病室でさぞかし孤独だったに違いない。しかし、作者はここできつぱりと「深夜の出勤」という言葉を選ぶ。その潔さに心から敬意を表したい、大宅壮一の「男の価値は潔さで決まる」という言葉を感じ出す。
(新山賢治)

道理が泣かされておる夜道歩く

柳泉洞

▼人の世の審判というやつは、感情で勝ち負けが決まります。たとえ正論であっても、強い感情の方が勝つてしまいます。涙が流れてきますが、夜道であれば、人に見られないです。「夜道」は人の世道かもしれない。
(大岳次郎)

▼通る筈の道理がなかなか通らない世の中。殊によく見えないくらい夜道などでは不合理なことが多く泣かされます。
(白松いちろう)

コップの透明な酒に染まってゆく

荻島架人

▼作中の「染まってゆく」がいいです。ゆつくりと味わうコップ一杯の酒に酔ってゆく感じ。
(無一)

母子草 未読の返事待っている

原さつき

▼郵便のサービス低下も御時世ということだが、便りの「返事を待つ」というヒトの心の性は変わらない。母子草はここに居てその姿自体が便りであり、返事でもある。ヒトの世に「待つこと」のある不思議、とでもいおうか。
(藤澤雅幸)

泣くことも笑うことも覚えて抱かれています子

富永鳩山

▼可愛いです。まさに赤ちゃんを言い得ています。泣いたと喜び、笑ったと喜ぶ周囲の幸せ。まさに赤ちゃんは天使です。こちらまで、ほっこりした気分になる句です。
(ちばつゆこ)

日向の電車のゆりかごに眠っている

無一

▼「電車のゆりかご」の措辞が、優しく温かい句ですね。電車にゆられて眠って本当に気持ちが良いですね。いつだったか、もつともつと眠っていたという日の事を思い出しました。
(山本説子)

コロナで負けるな鯛焼きのしつぽまであんこ

金澤ひろあき

▼生命力、気概が感じられ、自分をも奮い立たせているように思います。全く同感です。
(アカホリフキ)

雨を風を人の手を渡ってきた手紙の顔

富永順子

▼確かに、雨に濡れていたり曲がっていたりして手紙はやって来ます。句の中に人の人生を見ました。喜び、困り、泣いたり、怒ったりして、人も生きて行くんだと感じました。立派な顔の手紙になりたいと思いました。

(田中美夫)

今生の別れに感謝の抱擁をする

部屋慈音

▼この句に会ったとき直ぐに妻が浮かびました。一生カトリックを心に逝った妻は永い看護中にいつも言っていた言葉は「有難う」でした。そして句にある様にして私との五十五年の別れをしたのです。

(小山榮康)

裸ん坊にされたくねくねと笑う街路樹

平岡久美子

▼ほんとに裸木はみんな、違った形をしていてそれを「笑う」と表現された作者の視点は見事だと思う。寒さを忘れそうなユーモアがいい。

(原さつき)

人をゆるす事、今日川の青いこと

さいとうこう

▼人を信じたり疑ったり許したりその時々人は変わる、それでもいつたん人を許すと何と心が穏やかですがすがしいことか。さらさらと流れる川も今日は水底まで青く清んで心のわだかまりも消えていくようだ。

(井尾良子)

孫が赤子を抱いて佇む冬海の広さ

小山榮康

▼冬海の広さは無限の不安と絶望を漂わせている。それ故に赤子への愛おしさが増す。決して幸福ではないられない我々の未来を暗示させ孫の抱く赤子の幸福を祈っているようです。

(平林吉明)

スパッと秋の空 スプーンで何を計ろうか

井尾良子

▼深く澄んだ秋の空をスパッと切ってみたら一体どんな世界が表れるのでしょうか、わくわくしますが正直良いことばかりではないのだと、年

を経た姥は心配です、スプーンならぬ匙ですくつてもみたい気もします
が……

(平岡久美子)

他人の死にチョメチョメ カエルが涙

檜 幽可

▼チョメチョメという表現が何とも触手を誘う。チョメチョメが何かはその人の器量を表すのか？

(ホームセンター造林鎌)

何もかもはつきりさせてしまった虫眼鏡だ

久光良一

▼日常には、ある対象から距離を置くことにより心の平安を保っていることがたくさんあります。そうしたアフロリズムの要素が含蓄された技巧的な句だと思いました。

(室伏満晴)

▼真実はおぼろに見えていてちよいどいいことがある。はつきり見えすぎると想いを崩してしまうことがある。虫眼鏡とは深く追いつきすぎた自分の追求心であったのであろうか。作者のいつものひねりが上手い。

(部屋慈音)

あめんぼうツイツイふるさとの水の空ゆく

佐瀬風井梧

▼ああ、確かにあめんぼうはツイツイで、脳裏にふるさとの水溜りと映る空が浮かんできました。同時に作者が自由律俳句へ向き合う歳月も感じられ、素晴らしいのひと言です。

(佐川智英実)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wt-wing.net

〈締め切り〉2022年5月15日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、原則的に自由律俳句協会の公式ツイッターでも紹介させていただきます。ツイッターでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください。